18古今著聞集（橘成季）

　二年の合戦にはうたれにけりはになりて来たりければ、優してつかひけり。嫡のもとに朝夕しけり。

とうてい

非難した

降参した人

　ある日、義家朝臣、宗任一人を具してものへ行きけり。主従ともに狩装束にて、つぼをぞ負ヘａりける。広き野を過ぐるに一匹走りけり。義家うつぼよを抜きて、狐をかけけり。射殺さｂんはむざんなりと思ひて、①左右の耳の間をすりざまにしりヘ射たりければ、矢は狐の前の土にたちにけり。狐その矢にふせがれて、倒れて②やがて死ににけり。宗任馬より下りて狐を引きあげて見るに、「矢もたたぬに死にたる。」と言ひければ、義家見て、「して死にたるなり。殺さｃじとてこそ射はあてｄね、いま③生き帰りなむ。その時はなつべし。」と言ひけり。

追いかけた

ある所へ

手あつくもてなし

　すなはち矢を取りて参らせければ、やがて宗任して、うつぼにささｅせたまひけり。他のこれを見て、「あぶなくもおはするものかな。降人に参りたりとも、④の意趣は残りたるらむものを、をそらして矢をささする事あぶなき事なり。おもひきる害心もあらばいかが。」とぞ⑤かたぶきける。されども義家は、ほとんど神に通じたる人なりけり。宗任、⑥いかにも思ひよるべくもなかりければ、たがひにかく身をまかせけるにや。　 　（巻第九）

語注

＊十二年の合戦…平安時代後期に国北部で起こった反乱。

＊貞任…貞任。陸奥の豪族。・義家親子と戦い、敗死した。

＊宗任…安倍貞任の弟。

＊義家…父・頼義とともに安倍貞任を討ち、東国に源氏勢力の根拠を固めた。

＊うつぼ…矢を差して背負う武具。

＊雁股…殺傷力が強い矢。

問１　＝　線部ａ〜ｅの助動詞の意味をそれぞれ次から選び、記号で答えよ。

ア　使役　　イ　存続　　ウ　現在推量

エ　婉曲　　オ　打消　　カ　打消意志

ａ＝（　　　）　　ｂ＝（　　　）　　ｃ＝（　　　）

ｄ＝（　　　）　　ｅ＝（　　　）

問２　―線部①について、矢はどのように射られたのか。次の絵に→印を書き入れよ。（図省略）

問３　―線部②･③を現代語訳せよ。

②＝〔　　　　　　　　 　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

③＝〔　　　　　　　　 　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問４　―線部④は、何の「意趣」（恨み）か。現代語で簡潔に答えよ。

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問５　―線部⑤について、だれのどのような点を非難したのか。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　宗任が主人に無礼な態度をとった点。

イ　宗任が主人を危険な目にあわせた点。

ウ　義家が狐を仕留められなかった点。

エ　義家が不用心なふるまいをした点。

問６　―線部⑥について、

　⑴どういうことを「思ひよるべくもなか」ったのか。最も適当なものを次か

ら選び、記号を○で囲め。

ア　義家に今後は絶対的な忠誠を誓おうということ。

イ　義家の隙を突いて危害を加えようということ。

ウ　義家のように狐にも情けをかけてやること。

エ　義家のように超人的な武勇の人になること。

⑵そんな「宗任」の心中を、「義家」がよくわかっていたことがわかる一文を文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。

〔　　 　　　　〕

【解答】

問１　ａ＝イ　ｂ＝エ　ｃ＝カ　ｄ＝オ　ｅ＝ア

問２　（図省略）

問３　②＝そのまま死んでしまった

　　　③＝生きかえるだろう

問４　貞任を討たれた（一族を滅ぼされた）恨み

問５　エ

問６　⑴イ

　　　⑵すなはち矢

現代語訳　十二年の合戦で、貞任は敗死した。宗任は降参して出頭してきたので、手あつくもてなして（家来にして）使っていた。（頼義の）嫡男の義家殿のおそばに朝夕参上していた。

　ある日、義家殿は、宗任一人をお供にしてある所へ行った。主従ともに狩装束で、うつぼを背負っていた。広い野原を通りかかったとき狐が一匹走ってきた。義家はうつぼから雁股を抜いて、狐を追いかけた。射殺すのは残酷だと思って、左右の耳の間をかするようにして後方から射かけたら、矢は（狐の耳の間を抜けて）狐の（体の）前の土に突き立った。狐はその矢にさえぎられて、倒れてそのまま死んでしまった。宗任は馬から下りて狐をとりあげて見て、「矢も刺さっていないのに死んでいる。」と言ったところ、義家は（それを）見て、「おじけて気絶しているのだ。殺すまいと射あてはしなかったのだ、そのうち生きかえるだろう。その時はなしてやればいい。」と言った。

　そこで矢を取って（義家に）差し上げたので、そのまま宗任に、（矢を）うつぼに差し入れさせなさった。他の家来たちはこれを見て、「あぶないことでいらっしゃいますなあ。降人として参上したとはいえ、本来の恨みは残っているものを、脇をさらしたまま矢を（うつぼに）差し入れさせることはあぶないことでございます。（義家を殺すという）大胆な害意でも持っていたらどうなさいます。」と非難した。けれども義家は、ほとんど神のような（武勇の）人だった。宗任は、（義家に害を加えようとは）とうてい思いつきさえもしそうになかったので、互いにこのように身をまかせあっていたのだろう。